ジュラシック・トーク

仙台市の新しい音楽ホール　5　市民説明会

以前から、仙台市が建設を予定している音楽ホールの件について、公開された資料などをご紹介してきましたが、新たにその基本設計の中間案というものが昨年の11月18日に公開されましたので、そのご報告です。一応、その詳細な資料は、こちらから閲覧することが出来ます。

https://www.city.sendai.jp/sesakukoho/gaiyo/shichoshitsu/kaiken/2025/11/documents/setsumeishiryou.pdf

さらに、その内容に対する「市民説明会」というものが12月14日に開催されましたので、それに参加してきました。会場は、日立システムズホール仙台の交流ホールです（QRコード①）。

①

②

③

その時の模様は、映像でほぼすべて見ることが出来ます（QRコード②）。

https://www.youtube.com/watch?v=Tx1ClvusJZo

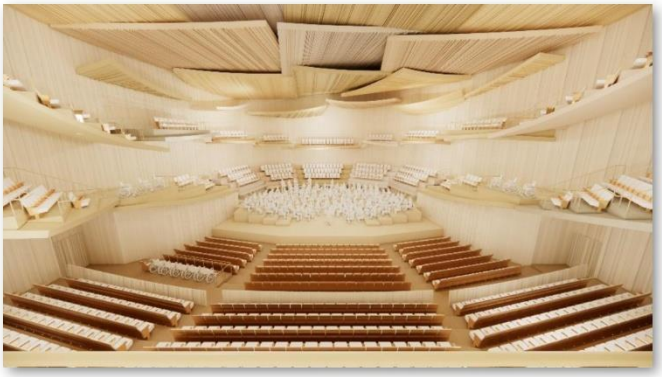
ただ、最後に行われた、参加した市民たちとの質疑応答の部分は、プライバシーの保護という観点からその映像からはカットされていて、その発言内容だけがこのテキストで公開されています（QRコード③）。

https://www.city.sendai.jp/aobayamaeria/hukugoushisetsu/documents/20251214_questionsandanswers.pdf

出席者は、仙台市の郡市長、設計担当の藤本壮介氏、ランドスケープ担当の忽那裕樹氏、ワークショップ担当の醍醐孝典氏、司会者は本江正成氏です。会の開催予定時間は２時間、その順番で４人の方々の説明が行われ、最後に質疑応答の時間が30分間設けられていました。

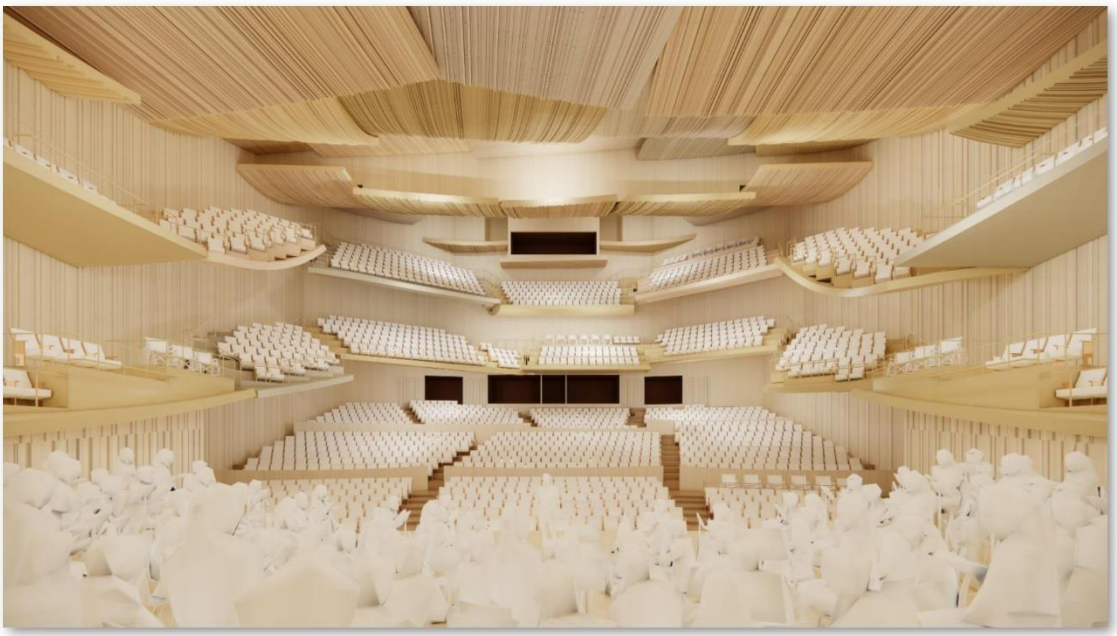
ここでまず注目したいのが、その音楽ホールに対して市が暫定的に命名したものが「（仮称）国際センター駅北地区複合施設」であることに注目です。つまり、この施設は単なる音楽ホールだけではなく、そのほかの施設も合体されている「複合施設」である、という認識が、計画当初からあったのですね。その、「ホール以外の施設」に関しては、「災害文化の施設」といった説明がなされています。
そこで、最も長い説明を行っていたのは設計担当の藤本氏で、前掲の資料に従ってこの施設の現時点での設計プランを詳細に語ってくれていました。その中で、音楽ホールに関して説明されていた部分を、そのままご紹介します。

藤本（設計者）：ホールは音楽ホール2000席だが、音楽の専用の時に使うのは、サラウンド型[(1)]という造りになる。ステージを囲むように客席が並んでいる。一方で、演劇とか講演会[(2)]として使う時にはプロセニアム型という、ステージの前にフレームがあって、その中がステージになっている。この両方が実現するようなホールを、今作ろうとしている。
まず、この、音楽のサラウンド型コンサートホールでは、ここにステージがあって、2階席、そして一部３階席が、ステージの後ろまでぐるりと回っている。これが、真ん中で演奏しているときに周りを取り囲んで一体感がある。みんなで演奏会を聴いているし、作り上げているのだ、という一体感のある音楽ホールで、海外を含めて音楽の専用のホールではこのような造りにしていることが多い。有名なものだと、ベルリンのフィルハーモニーというコンサートホールがある。
そして、演劇の時だと、このままでは使いにくくなるが、実はこのステージの背後の部分がそのまま後ろに下がっていき、フレームが出てくるという仕組みになっている。そうすると、このステージは幕などを垂らして演劇や講演会で使えるようになる。



コンサートホール

プロセニアム



ステージから眺めた客席

席数は、両方とも2000席を確保している。ステージの後ろに席があるから、こちら（コンサートモード）の方が少し多いのではないかと思われるかもしれないが、実はそこではステージが前に飛び出しているので、ステージがバックするとその分席が増える。そのように工夫して、両方とも2000席を確保している。
特に、音楽ホールの状態では、生の演奏の音響が一番大事。そこに関しては永田音響という音響エンジニアリングの日本の会社で、実は世界一と言われている、世界に名だたる色んな音楽ホールの音響設計を手掛けている世界的な会社にお願いしている。このプロポーザルがあった時から、その音響会社を使うようにとの仙台市からの指定があった。これは非常にありがたいこと。そこのエンジニアの方とやり取りをしながら進めている。
具体的には、今はコンピューターで解析をすることが出来るので、壁や天井の反射による音の伝わり方や、適切に音が回る様子が、かなり細かいレベルで解析しながら作っている。全体の構成の中で、ひとつ大事なのが、高さ。空間の高さがあることによって、響きの豊かさが生まれる。それがそのまま建築の形にも表れてくるので、この高さをしっかり確保して、さらに幅、そして奥行きの適切な設定が大切といったような様々な条件がある。それを専門のエンジニアと一緒に日夜より良い音を求めて、やっている。
私自身もいくつか音楽ホールを作った経験がある。石巻のホールとか、ブダペストの音楽ホールも手掛けた。その時も永田音響さんと一緒にやらせていただいたので、お互いのやり取りの経験もある。さらにそれをブラッシュアップして、緊密なやり取りを行っている。
細かいところでは、このホールの木の壁の表面の凹凸の付け方によって響きの質が変わってくる。そこまでを含めて、細かい検証している。もちろん、各座席からちゃんとステージが見える（サイトライン）ようなチェックも行っている。
プロセニアムになった時も、音がしっかり響くように検証している。今回、音楽ホールと、演劇、講演会の両方の状態を実現するということがミッションになっている。では、どこかで妥協しなければいけないのか、と言うと、我々としても嫌だし、仙台フィルさんはじめ、海外のオーケストラの方を招いた時も、それは音楽ホールとして世界一級のものを目指したいという思いがあるので、普通の多目的ホール以上の熱意と工夫を入れ込みながら作っている。多目的ホールと定義上はなるのだが、サラウンド・モードとになった時は音楽専用ホールとして世界一級だと言って差し支えのないものになるように、いま作っている。

司会者からの「当初の設計から変わったところがあるのではないか」との質問に答えて。

藤本：プロポーザルからは大きく変わったところがある。それはホール。プロポーザルの時はホールが真ん中にあって、特別な時にはホールの壁が開いて建物全体が一つにつながる[3]というものだった。多様なものが普段は共存していて、それは特別な時にはつながるというコンセプトはそのままだが、ホールが開いてつながるというのが、プロポーザルの時の案だった。
設計が始まった段階で、すぐに、まずは仙台フィルの皆さんとかなり密にやり取りをさせていただいた。その中で音響的な懸念とか運営的な懸念、それから、仙台フィルの皆さんの思いを深くお聞きする中で、ホールが開くということについての実現性がなかなか難しいことが分かってきた。
もう一つ、一方でホールが開いて真ん中にあると、全部がつながってできることが、やはりホールが前提になってくる。そこは普段プロフェッショナルな方々が使っているところなので、ちょっと近寄りがたい雰囲気があったな、と。では、ホールを閉じてしっかりとしたホールを作ると同時に、特別な時に全体が繋がれるというのが、ホールのスペシャリストだけではなく、まさに市民の方々の企画のイベントで全体が繋がるということも、出来たほうがいいのではないかと考えた時に、今日お見せしたように、ロビーのところには全体とつなぐ空間、そしてホールも繋がれることのできる機能としてそこにある、災害文化の展示室やワークショップの空間、あるいはレストランという他のいろいろな空間も含めて全部が、ロビーによってつながっている、と。

そうすると、特別な時に全体をつなげて行うイベントの時の幅がものすごく広がる。例えばファッションショーといったようなあらゆることをこのロビーの空間で行うことが出来る。それによって全体が繋がるというのは、より市民の方にこの施設を開いていくことが出来るのではないかと考えた。その意味では、プロポーザルから案を変えるというのは、なにか妥協してしまったのでは、という印象を受けがちだが、我々としては、まずは仙台フィルさんというプロフェッショナルな方々の意見をお聞きしながら、どのように案を良くしていくかと考えると、実はホールは真ん中にあるよりも、ロビーが真ん中にある方がいいのではないかと、発展的に変化していったものだと理解してほしい。ただ、かなり大きな変更なので、なかなか大変だった。今も設計を進めているが、これはやはり価値ある変更だなと考えて、やらしていただいた。

ロビー

参加した市民からの発言と、それに対する質疑応答

ここでは、発言の中から、ホールに関するものだけを掲載しています。それ以外にも建築全体の話とか、提示された建築のための予算（548憶円！）についての質問もありました。

質問者A：最高の音を作りたいというお話があったが、2000人のホールは、音楽ホールとしては大きすぎる。1500席ぐらいが、音楽関係者などの間では適当だと言われている。ウィーン・フィルの場合は1200～1300で、世界的に仙台フィルよりはるかに大きな規模のオーケストラが演奏するところでも、1500人ぐらいのホールが使われている。2000人のホールで、多目的で、仙台フィルのような少人数のオーケストラが演奏すると、音が貧しくなってしまう。それは仙台フィルの技量とは全く別の問題。転換機構は、音響に影響を与えるのは明らか。永田音響ではシミュレーションが出来ない。

市長：ずっと以前から2000人規模のホールが欲しいという声が数多く寄せられていた。仙台フィルの演奏だけではなく、吹奏楽の全国大会や、合唱コンクールなどにも使いたい、さらに世界の大オーケストラの演奏も聴きたい、いう声も。そんな様々な声で、2000人という声が多かった。永田音響さんでは、あらゆることを行ってよい音を追及している。

藤本：大きくなると音響も難しくなるのは確か。永田音響さんとは、そのサイズゆえに問題が起こるということは今はない。空間の大きさが、そのまま響きの豊かさになる。転換機構はあまり複雑なものにはなっていない。後ろ側がそのままバックステージに水平に移動していくという構造。ばらばらに分解されているのではない[(4)]。シンプルな構造なので、故障も少なくメインテナンスも楽。可動部分が少ないので、それが音響的なリスクにはならないはず。

同じ質問者：同じ2000人規模の県民会館も出来るので、何年に１回というようなコンクールなどは、そちらで賄えるはず。

市長：県とは、知事とも事務方とも協議している。共存していけるというデータもある。

質問者B：世界に誇れるホールを作ろうとしているという話だったが、先ほどのベルリンのフィルハーモニーや、永田音響さんが作られたサントリーホールやミューザ川崎などに比べると、明らかに足らないものが一つある。それはパイプオルガン。確か、以前2000席規模のホールを作るときに行ったアンケートでも、そのような要望があったはず。世界に誇れるホールであれば、パイプオルガンは必須。

市長：アンケートについては資料が手元にないが、意見は受けとめさせてもらう。

質問者C：可動式の音楽ホールに懸念。可動式で成功しているホールは聞いたことがない。本当に良いホールなら、日本中はおろか世界中から聴きに来る人がいるはず。３ヶ月くらいたてば、その評価は決まってしまう。音響については、もっともっと煮詰めてほしい。パイプオルガンは必須。こけら落としで期待するのはマーラーの２番や８番のような、オルガンが活躍する曲。

質問者D：お客さんが2000人も来るようなコンサートはほとんどない、1500席が適当。アマチュアのオーケストラや合唱団も、2000人では使うのに躊躇する。

質問者E：演劇ファンとしては期待外れ。このホールは演劇のことは全く考えられていない。

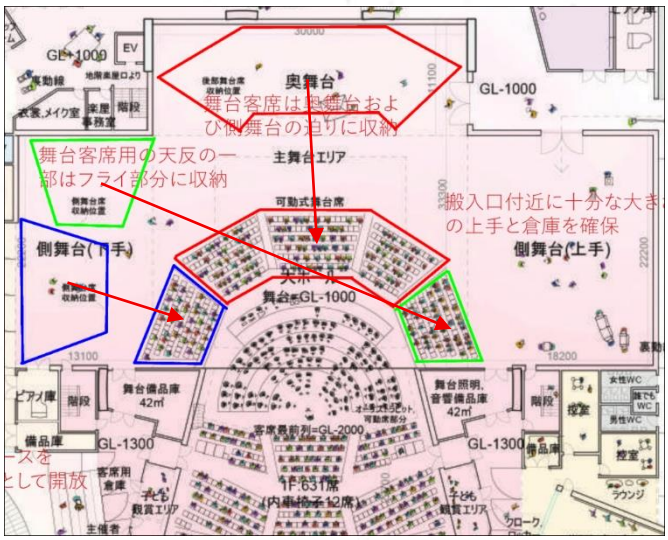
赤字の部分の注釈です。

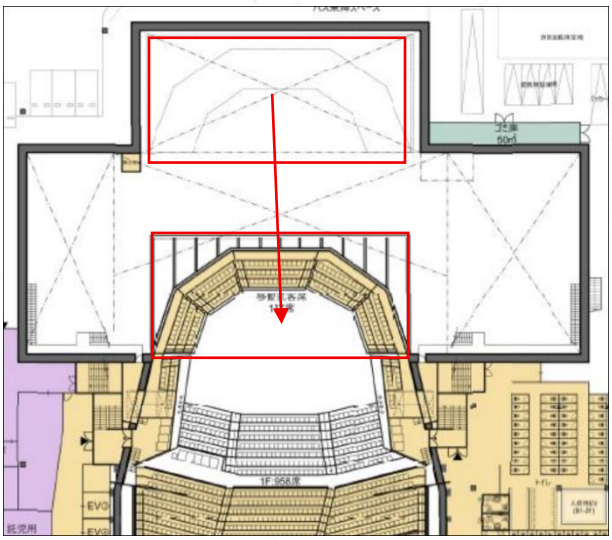
(1)：ふつう、コンサートホールの音響設計の現場ではこんな言葉は使われません。いかに設計者が音響設計に疎いかがうかがえます。

(2)：これ以外に「オペラ」という話もあったはずです。というか、この設計では、明らかに大規模なオペラやバレエの上演として設計されています。でも、ここで大規模なオペラを上演するという話は、説明会では全く語られませんでした。そもそも、2000人も集める「講演会」って、なんなのでしょう。

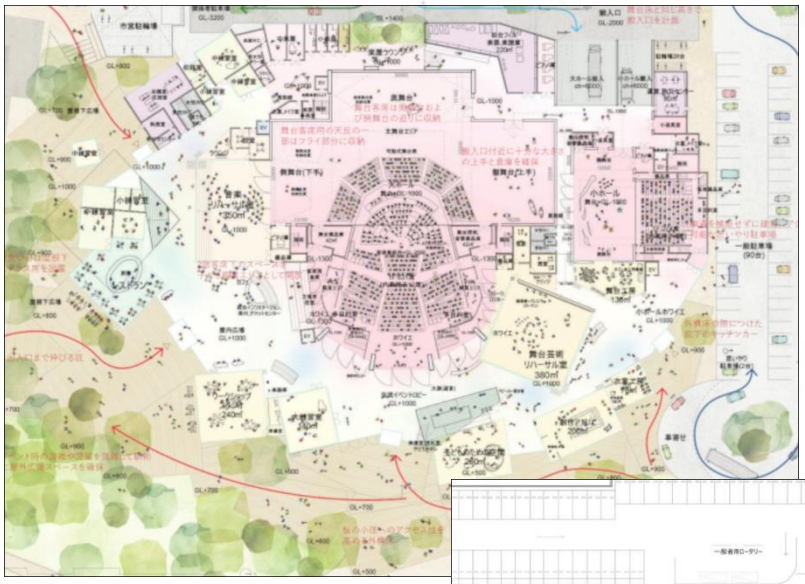
(3)：この計画を聴いた時には絶句しました。そもそも、こんな発想を持っていた人にコンサートホールの設計を任せるなんて、間違っています。

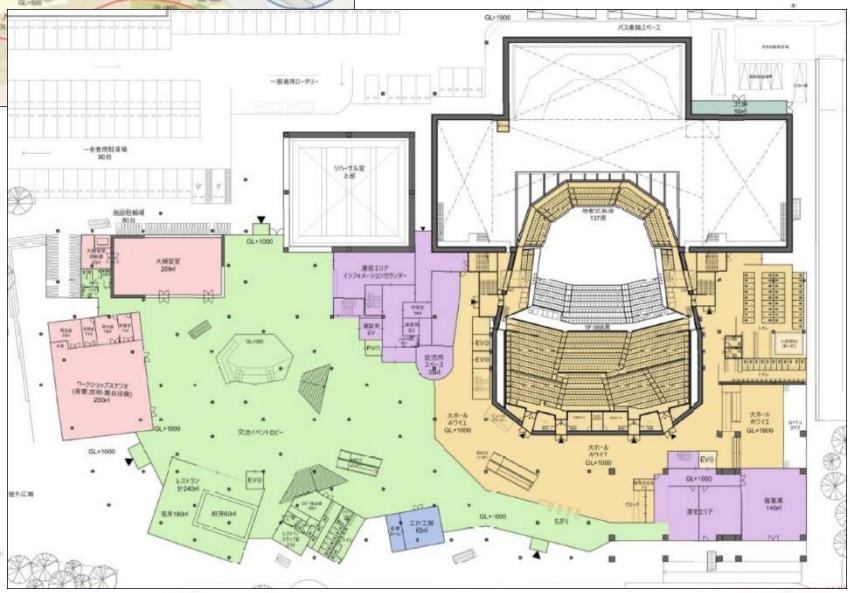
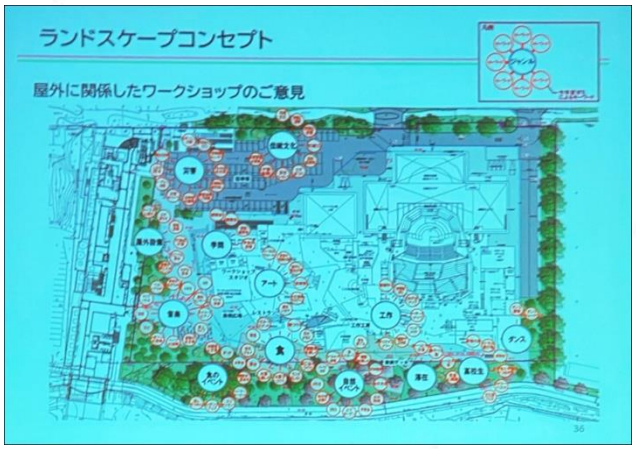
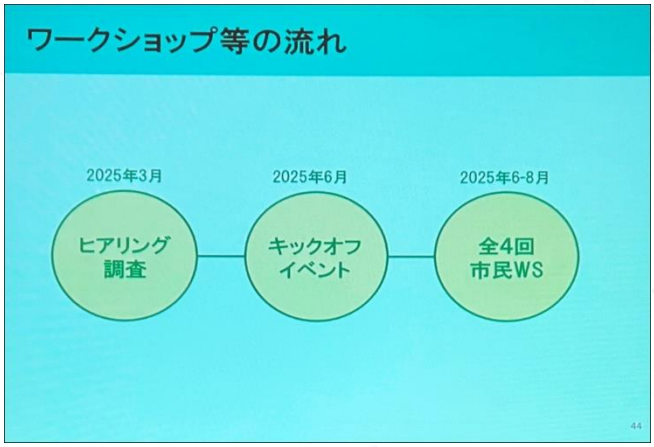
(4)：以前の設計では、可動式の客席は３つに分解されるようになっていました（下図左参照）。それがなぜ右のようになったかの説明は全くありませんでしたが、シンプルな方が好ましいということに気づいたのでしょう。





(5)：追加になりますが、話の中にあった大ホールの位置の変更についても、以前のものと今回のものを比較してみます（下図参照）。





なお、藤本氏の説明の後（質疑応答の前）には、ランドスケープ担当の忽那氏と、ワークショップ担当の醍醐氏との説明が行われていました。ただ、これはホールとは全く無関係なホール外部の植栽の話と、「災害文化」に向けてのワークショップに関する説明でした。そもそも、この施設のコンセプトが「音楽ホールと災害文化を合体させたものを世界に向けて発信する」といったようなことなのだそうで、それは「これまで世界のどこにもなかったもの」と設計者は得意げに語っていたのですが、そんなものを、果たして仙台市民は望んでいるのでしょうか。少なくとも、音楽ファンにとっては失望させられるものでしかありません。